

# 知っておきたい 『ヌーベル漢方』の考え方

近畿大学東洋医学研究所 所長・教授 武田 卓 先生

1987年 大阪大学医学部 卒業、同産婦人科 入局  
1996年 大阪府立成人病センター 婦人科  
1998年 大阪府立母子保健総合医療センター 産科診療主任 医長  
2004年 大阪府立成人病センター 婦人科 副部長  
2007年 大阪大学医学部 助教(学内講師)  
2008年 東北大学大学院医学系研究科 先進漢方治療医学講座 准教授  
2012年 近畿大学東洋医学研究所 所長・教授  
東北大学医学部産婦人科 客員教授



近畿大学東洋医学研究所は、近畿大学病院が開設された1975年に大学直属の漢方専門研究所として発足した。当研究所は、わが国で最初の漢方の臨床・基礎を研究する研究所として、現在に至るまで数多くの実績をあげている。2012年に当研究所の第4代所長・教授に就任された武田卓先生は、ご専門の女性医学を主にしながら、日々の診療と研究の両面でご活躍されている。そこで今回は、武田教授ご自身が提唱されている『ヌーベル漢方』(和洋折衷のハイブリット漢方)の考え方と、漢方治療の実際について伺いました。

## 自由診療を行う東洋医学研究所附属診療所

近畿大学東洋医学研究所は、発足当初より、わが国でも数少ない臨床だけでなく基礎部門も有しているという特徴があります。

基礎部門については、脳神経科学研究の権威である遠山正彌先生を中心に、最先端の分子生物学的手法を用いて、漢方薬の作用メカニズムの科学的な解明に取り組んでいます。抑肝散の神経機能に対する効果についての科学的解明や、加味逍遙散の作用メカニズムに関する研究などを精力的に進めており、国内外にその成果を多数報告しています。

臨床部門では、自由診療を行う当研究所附属診療所(週3回)と、保険診療を行う漢方診療科(週1回)を開設しています。附属診療所では煎じ薬による診療を行っていますので百味筆筒など生薬の調剤設備も有しており、専任の薬剤師が調剤と服薬指導を行っています。また、鍼灸師も在籍し、漢方と鍼灸の併用治療も行っています。

附属診療所では非常に高品質の生薬のみを使用していますし、保険診療の枠内では施行できないような検査も施行しています。もちろん、患者さんの病態によっては保険病名に関係なく、しかも複数の漢方処方剤の併用も行うなど、漢方薬の持つ効果を最大限に活用しています。

現在、煎じ薬を処方する医療機関は多くないため、附属診療所には煎じ薬による治療を求めてかなり遠方に居住する患者さんも通院されています。以前は不妊症治療を目

的に受診される若年女性が多かったのですが、最近では高齢患者さんを中心に中高年の患者さんが増加しています。

また、他院からの紹介患者さんも多くいらっしゃいます。近隣の医療機関はもちろんのこと、大阪府下の医療機関からご紹介いただく患者さんも増加しており、当研究所および附属研究所を広く認知いただいていることを実感しています。

## 西洋医学と漢方医学の特徴を活かす「ヌーベル漢方」

附属診療所は「東洋医学」を標榜していますが、決して漢方治療ですべての患者さんを診療しているわけではありません。

私自身が、産婦人科医として西洋医学の研鑽を積み重ねていく中で漢方医学の良さを知るようになり、日々の診療に漢方治療を取り入れることの必要性を実感するようになったという経緯があります。たとえば、婦人科領域の子宮頸がんでは放射線療法を施行することが多くあります。放射線療法は非常に有効な治療手段なのですが、放射線性腸炎のように西洋薬だけではコントロールが難しい副作用が現れることがあります。そのようなときに漢方薬を併用することで症状をコントロールするようになったことが、私の漢方との出会いです。その後、がん治療後の女性心身症に興味を持つようになり、治療選択肢の一つとして漢方薬を積極的に使用するようになりました。

西洋医学的にあらゆる精査をしたにもかかわらず異常所見がなく、症状も改善しないまま、肉体的、精神的、さらには経済的な負担が続くというような患者さんがいらっしゃいます。このようなケースに対して漢方治療は患者さんの体全体、症状全体を診て症状を改善するというように、西洋医学とは異なる視点からの診療ができます。つまり、西洋医学の隙間を埋め、西洋医学と漢方医学のそれぞれの特徴を活かす「和洋折衷のハイブリット漢方」が現代医学における漢方治療の適応であり、今まさに求められている医療であると考えています。

そこで、私はこの考え方を『ヌーベル漢方』と名付けました。これは、中華料理にフランス料理の良い点を取り入れた「ヌーベルシノワ」になって名付けました。詳細については、『女性診療で使えるヌーベル漢方処方ノート』※という書籍を刊行していますので、ご興味ある諸先生には是非、お読みいただきたいと思います。

### 増加しているフレイル・サルコペニア

近年の高齢化の急速な進行に伴い、高齢者を中心にフレイル・サルコペニアの患者さんが非常に多いことを実感しています。しかも、コロナ禍において外出機会の減少により運動量は低下し、外部との交流機会も減少しています。このような状況において、疲労倦怠感、食欲不振などの症状を訴えても検査所見では異常がなく、漢方治療を勧められるという患者さんが増えています。このような患者さんには人參養榮湯や六君子湯などを処方する機会が多くあります。また、睡眠障害があれば酸棗仁を加えるなど、患者さんの状態や訴えに応じてフレキシブルに処方を組み立てています。

附属診療所では女性患者さんを中心に、「むくみ」「冷え症」の専門外来も開設しています。冷え症外来に、夏でも待合室で毛布を掛けているような方がいらっしゃいました。ご高齢でサルコペニアでもあったのですが、この患者さんに人參養榮湯を処方したところ、3~4ヶ月の服用でサルコペニアだけでなく冷えも著明に改善しました。体重はわずかな期間で増加しましたし、さらに1年後には毛布が必要ないばかりか、靴下も履くことなく外来に来られるようになりました。

### 女性医学における漢方治療の実際

更年期障害の症状は多彩ですが、特にホットフラッシュにはホルモン補充療法(HRT)が奏効しますので、私は漢方治療を目的に受診される患者さんにもホットフラッシュが主訴であればHRTを処方します。しかし、HRTだけでは精神症状等の改善が難しい場合が多くあります。そのような患者さんには漢方薬の併用が効果的です。たとえば、



(近畿大学医学部・病院事務局ご提供)

倦怠感や不安が強い場合には加味帰脾湯や加味逍遙散、さらにイライラがひどい場合は抑肝散を処方するなど、患者さんの訴えに応じて漢方処方を選択しています。

また月経前症候群(PMS)の患者さんにも西洋薬による治療を行っていますが、SSRIやピルの服用によるむくみなどの副作用対策に六君子湯、むくみが現れる場合には当歸芍薬散を処方することもあります。このように西洋医学的治療と漢方治療を組み合わせる「ヌーベル漢方」によって治療の幅が広がることを日々実感しています。

### 漢方薬を使用する際には他診療科の処方にも注意が必要

漢方薬はその効果に加え副作用が少ないことから、多くの臨床医が漢方薬を処方されています。漢方薬を処方される際にご注意いただきたいのは、他の診療科でも漢方薬が処方されており、患者さんによっては複数の漢方薬が処方されているケースがあることです。処方されている漢方薬によっては甘草などの生薬が重複している可能性もあるので、他の診療科から漢方薬が処方されていないかどうかを確認することも重要です。

### 高齢化に伴い漢方のニーズは高い

漢方薬は一剤で種々の症状を取り除くことができます。しかも非常に安価ですから、患者さんのメリットは大きいですし、わが国の医療経済においても有用な治療手段です。

また、急速な高齢化に伴って増加が予想されるフレイル・サルコペニアは西洋医学的な介入方法が乏しいですが、人參養榮湯や六君子湯などのように治療効果が明らかにされている漢方薬もあります。このように、西洋医学にはない効果が期待できる漢方薬は、これからの医療において、よりニーズが高まると思います。

※女性診療で使えるヌーベル漢方処方ノート、メディカ出版、2017。定価(本体3,600円+税)